

沖縄の記憶と意識

我部, 政男 / GABE, Masao

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

315

(終了ページ / End Page)

331

(発行年 / Year)

2004-08-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002672>

沖繩の記憶と意識

我部 政男

一 はじめに

本稿は科研費研究「琉球列島における社会的、文化的ネットワークの形成と変容に関する研究」の一部である。この基本課題を自己の関心に引きつけて、問題意識を膨らませて考えてみたのが、ここに示した「沖繩の記憶と意識」というテーマである。

題として掲げたテーマが、あまりにも漠然として、何を論じたのか、はっきりしない題になっていることは否めない。一般的に言えば、日本人の中の沖繩意識と沖繩人の日本意識をめぐっての問題であることが判る。しかし、その課題に入り込むに先だって、言葉の厳密な意味で日本といい、沖繩といい、その学術的な区別や境界をどこに求めるか、複雑で厄介な問題が山積している。そのような出入り口のはっきりしない課題は、取り扱いに関して特に慎重を要する。とかくここではテーマにアプローチできるよう論旨を進める過程で少しく明らかにすることにしよう。

さて戦後約六〇年、沖繩はアメリカ合衆国の二七年間の統治を経て、日本復帰・沖繩返還を実現する。その返還の時点からでもすでに、三二年が過ぎた。二〇〇三年は、日本政府と沖繩県の共同主催による日本復帰記念式典が、小泉純一郎首相の出席の下に東京と沖繩の宜野湾市で行われた。今日の沖繩をめぐる状況と認識は、戦前や戦後におい

ても、それほどかけ離れた相違は、存在しないかのように、私には見える。近代日本の沖繩意識を学問的に解明しようとする行為は、今日においてもなお古くて新しい課題のようである。伊波普猷の生きて活躍した時代から数えて、いくらかの時間が経過した。確かに、時系列的に見るならば、日本国家の憲法一つとってみても、戦前と戦後とは、その名称の変更、天皇制国家から国民主権の国家へと大きな変化が見られる。

ここで私は、近代以降の沖繩についての認識、あるいは沖繩の歴史に対する意識について、その取りあげ方の変化・変容の経緯を考えてみたい。取りあげる人物は、当然、限定せざるを得ないが、戦前期の伊波普猷と柳田国男と河上肇という三人をめぐる問題、さらに、戦後の復帰・返還運動のなかでの中野好夫、比嘉春潮の伊波普猷に対する認識などを検討の素材にしたいと考えている。これまでこの分野に深く係わり、研究を推進し、後進の燈台的な役割を果たしてきた住谷一彦著『日本の意識—思想における人間の研究』（岩波書店、一九八二年）や鹿野政直著『近代日本の民間学』（岩波新書、一九八三年）、外間守善著『沖繩学への道』（岩波現代文庫、二〇〇二年）の著書で展開している課題や議論などを導きの糸のもとに進めていきたい。ここには、近代沖繩の意識のさまざまな側面が照射されていて、示唆に富んだ課題が濃縮されている。

これらの著作に接していると、ほとんど付け加えることはないことを痛感させられる。

二 認識の軸

まず、学問的な対象として沖繩を考える場合の基本認識として、分野によりさまざまな思考様式が考案されるはずであるが、ここでは私が、主として学んでいる時期の明治維新と沖繩という視点に強く引き寄せて、述べてみることにする。逆になるようであるが、結論から先に言えば、近代沖繩認識の大方の流れは、この時代に形成され、規定されたものであると考えられる。もちろんその構成要素の根底には、前近代の諸要因が色濃く存在することを否定する

ものではない。部分的ではあるが、近代以前の歴史についても、後で触れることにする。この琉球処分期の時期に、やまと日本本土と琉球・沖繩の両者を思考の過程で対立、分離、統合したりする二元論的な発想の沖繩認識の方向性は、沖繩研究のなかにも持ち込まれている。さらにこの沖繩への認識は、沖繩からの日本に対する認識にもつながっていくものでもある。すなわち、沖繩のなかの日本、日本のなかの沖繩は、換言すれば一枚の紙の裏表の関係にあり、相互乗り入れの関係にもある。その点を配慮しながらも、時として事柄の両義性を形成していたともいえよう。

今日、復帰（返還）三〇周年目を迎え、その復帰を実現したこと自体が、はたして好ましいことであったかという選択の結果に反省をこめて議論もなされている。この復帰を実現したいという基層の考え方には、戦前に行われた日本国臣民教育の結果として、作り出されたナショナリズムに強く起因すると考える論者が少なくない。その点に関連して、戦後のアメリカ統治下において、伊波普猷の思想と学問をどのように理解し継承・発展させるかという課題が執拗に繰り返し問われてきた。それはまた近代日本国家の国民統合策としての日本ナショナリズムを積極的に展開した研究者としての伊波の学問と思想への批判に連動していた。つまり、伊波普猷に対する批判は、おしなべてそうであるように、彼が生きて活躍した時に始まったものではなく、彼の死後、戦後の沖繩の直面するアメリカ統治社会と向き合うなかで形成されてきたものも少なくない。伊波の考え方を現代に再生し、時代の課題と正面から対峙させたのであった（そのような思考方法は、例えば謝花昇の場合にも濃厚に見られる）。換言すれば、それは伊波の思想の歴史的な意義を問う営為であり、また伊波の学問と思想の強靱さをしめす査証でもあろうか。それがまた沖繩学の視野を大きく広げる結果にもつながっている。

三 縮図論の周辺

一概に縮図論といっても、その内容は主張する人の視点や力点によって異なる。枠組みのスタイルを図式化すると、

ある断面を中心の内部に向けて収斂させる方式と、逆に外部に拡散させる方式の二つ運動の方向が考えられる。縮図は、大を小にする運動の方向をとるとすれば、やまと日本本土の島々を沖繩の島々の方向に微分化する思考を踏襲しているように見える。したがって、そこには、例えば相似、類似、源流、源泉、原型、起源という言葉の陰がいつまわるようになる。

さて、住谷一彦著『日本の意識―思想における人間の研究』のなかで、すでに指摘されていることである。そのなかで河上肇も述べているが、沖繩に対する伝統的なものの方や認識のなかに、日本の縮図としての沖繩という思考様式がある。伊波普猷が、沖繩を天然の博物館にたとえたことも、こうした認識や世界観に起因していると説くのと共通する。この概念は、日本におけるさまざまな事象を比較手法を用いて、小さくすると沖繩に収斂するとの姿勢で貫かれている。あるいは、逆に沖繩に存在する事象のすべてを並行的に拡大していくと、全国的に存在する日本的な事象として重なり合うという直接的な意味合いが、相似的な運動として存在していることを示している。また、文化的な事柄の理解に対する抽象的な見方である場合もある。さらに、沖繩が経済的に疲弊しているときには、日本も疲弊しているというように、文化的、政治的、経済的、あらゆる面で、沖繩に生起する現象を類型化の縮小ないし拡大化して考えるというのが、この概念のなかに含まれている。

終戦の早い時期に柳田国男が『日本人』（毎日新聞社）で述べていることは、沖繩の研究に関心を示す者が反芻すべきことがらのように思える。すなわち、

「あるいはすでに気づいている人もいるかもしれないが、南の島々では、内地に比べて天然資源がとほしいにもかかわらず、人口は近年になって内地以上の勢いをもって増加している。そのために機会さえあれば、海を越えて出かせきに出るのが非常に目立った。しかもこの島に残った若干の才知のすぐれたごさかしい者は、他県や外国の大きな資本家の手先になって、同じ島に住むゆかりのない人の利益はもちろん、油断すれば縁故の者までがその損害を

受けかねない状態であった。交通が開けるに従って船会社が、次いで問屋業者がというふうに、次から次への新しい資本攻勢に当り、生産者たちは仲間の裏切りのためにかなりの辛苦をしている。実際に考えてみると沖繩に限らず、大きな島である日本内地でも事情は同じである。他の力を利用してすぐれた地位を得ようということは明治の代に発達してきたのであるが、…（中略）…。極端ないい方をすれば、身の安全を保つためには、外国に従属することもいとわれないという植民地根性は、かなり強い力となって今日もお指導者の間に共通しているのである。」

この柳田の指摘には、単に人口問題のみならず、島社会の支配服従関係の政治力学等の分析にも当てはまり、今日でもなお十分に傾聴に値するテーマが含まれている。とかく、沖繩が日本の縮図であり、また一つの変形であることには、かわりはない。世界史の普遍法則が、あらゆる地域の歴史にも貫徹されるという考え方を髣髴させる発想である。

不思議なことに、この日本の縮図としての沖繩という言葉には、近代の日本国家の権力の中心から疎外され、無視されつつけられてきた沖繩人にとって、等質性を保有するという点で、耳障りもよく、非常に好まれてきた。その内実の具体的な実態はともあれ、沖繩が何らかの意味で関心を引き、注目され取りあげられるところに、心地よい安心感を与え、ある自尊心をくすぶる役割をも果たしたのであろうと想像される。それは、あたかも荒れ狂う台風の中心の眼が沖繩の特定の地方に存在するような状況、即ち、あたかも日本の中心が、一時的であれ、沖繩地方にあると錯覚させる発想とも共通する。関心の中心に存在するという意識は、無抵抗にも沖繩人をいたく感心させ、ある意味で麻薬的な思潮をも持たせていたのではなからうかと思う。そのような意識の影響力は結果として、徐々に受容されてきた。言い換えれば、この沖繩縮図論的な発想は、極めてごく自然に人々の脳裏に浸透していった。またその思考は、温存され、消えることなく繰り返し再生産され、また必要に応じて主張されてきたのである。縮図論的な見解については、また後に詳しく見ることにする。

四 同化と抵抗

沖縄近代史を一つのまとまった時期区分の歴史としてみるならば、明治の琉球処分と戦後のアメリカ統治という二つの出来事は、大きな歴史の転換期として扱うことができる。これは、琉球・沖縄の社会内部の権力構造の転換という意味で、非常にはっきりとした特徴を示す事件でもある。この転換を政治学的に考えると、日本の中央政府と地方との関係のあり方にも共通し、置き換えて考えることもできる。中央の視点からすれば、先の第一の転換期にあたる琉球処分期をもって、日本近代国家のネイション・ステイツがほぼ固まったといえる。日本近代史家の田中彰が述べているように、明治維新は北海道と琉球（琉球処分期）を包み込むことによって、近代国家としての日本の統一をなしとげた（田中彰『明治維新』講談社学術文庫、二〇〇三年）。この第一段階から大きく明治日本の近代国家の意思が、政策というチャンネルを通じて沖縄地方にそそぎ込まれる。政治的な国民国家統合の強力な嵐であり、日本国家の政策決定者が、琉球を客体として文化的に同化しながら臣民化していく過程でもある。

この時期の上からの同化過程の問題を沖縄の側から自己の内面をと通して、いかに国家の激流に抵抗したかが、比嘉春潮ら同世代の人々の生を切り開くに直面した問題でもあった。

次に二番目の大きな転換期は、日本の敗戦にともなって、沖縄がアメリカの統治下に入ったということである。この時代の思潮は、直接的には、琉球処分期に創られた行政機構としての沖縄県は消滅し、日本の行政区域の統治から離れ、アメリカという異民族の支配に入ったことになる。そこには必然的に、ナショナリズム的な思潮が生成されていた。これは先に述べたように、戦前期の国家による臣民教育としてのイデオロギーの集積の成果が、敗戦による分断の危機意識の台頭に強く触発され、新たな潜在力を発揮していったことを物語っている。その場合、過酷な異民族支配という政治的な現実の重みがかかっていることを忘れてはならない。

繰り返すが、戦後沖縄におけるナショナリズム運動の喚起の背景には、異民族のアメリカ支配との接触がその前提にあるが、限りなく日本国家への合体を希求する大和国家ナショナリズムとともに、琉球処分以前の近世及び古琉球の時代にさかのぼっていくもう一つの琉球王国的なナショナリズムがある。国家を思考しないナショナリズムなど本来有り得ないが、沖縄のこの二つの考え方は、あるときは相互に接近し、あるときは反発離別したりしてきた。このように内と外の二つの方向に作用する背反・凝集的な現象というのは、広く言われているように、歴史の転換期にはよく見られる普遍的な現象である。この二つのナショナリズムをあえて区別するために、琉球の近世的なナショナリズムと近代日本国家的なナショナリズムと称すことにしたい。沖縄の人々の意識の中には、伝統的な思考と近代国家によって注入された意識とかが混在していた。

ともあれ、沖縄戦の体験を経て、さらにアメリカ統治という異民族の支配の試練をうけ、日本政府への行政権の返還が決まり、日本復帰が実現する。その歴史の文脈には、実にさまざまな要因が絡まり混入している。

日本復帰後の沖縄にも、理念と現実の乖離があり、たとえば基地問題に象徴されるように、日米安保条約下における日本政府の果たす役割の重要な部分を沖縄の基地に押しつける結果となる。この日本政府の基本的な姿勢は、明治政府の政策から一貫して取られてきた伝統の一面である。戦後日本国家のその縮図が、またしても沖縄地方に再生産され残されたことを意味する。そして現在、冷戦の時代が終わり、その遺物であるはずの軍事基地がなくなるかといえは、事態は逆の方向に進行している。中東アジア、東北アジアの緊張によって、再び沖縄のアメリカ基地の重要性が高まってきた。このことは、歴史的な負の遺産を的確に整理しないまま、時間切れのようにまた次の時代へと先送りする弊害のようなものである。戦争責任の問題が決着見ることなく、うやむやの裡に新しい戦争の危機を迎えているかのような状況である。時代の展開や軋みを見せる地域の宿命的な形態なのかも知れない。

琉球王国は、明治政府によって禁止されるまで清国（中国）との冊封・朝貢関係を保持してきた。幕藩体制のなか

に組み込まれているとはいえ、対外的には琉球王国として独自の国家システムを維持してきた。その冊封・朝貢体制は日本の近代国家に取り込まれることによって終焉する。国家体制のシステムは、ほぼ完全に崩壊させられるが、その歴史によって形成されてきた貴重な体験は理念として人々の心のなかに深く根を残り継承されていく。

戦後のアメリカ統治を経て、再び独立琉球王国的な考え方、すなわち琉球王国的なナショナリズムという主義が記憶を呼び覚ましたように澎湃として台頭してくる。琉球独立論的な沖繩の国家構想は、アメリカ統治への対抗策として、またアメリカ政府及び日本国家を視野に入れつつも、現実の異民族支配からの解放策として提起された側面を持つが、必ずしも多くの人々の強い支持を取り付けることはできなかった。敗戦時の社会的な貧困の時代の制約が、陰を落としていたと考えることもできよう。理念よりは現実の生活に人々の関心が向けられていた。

実践的な問題提起は、時として歴史的な事実の解釈と関連の下になされるのが一般的である。その点で先の琉球独立論的な傾向の主張は、琉球王国への収斂という解釈によっては、時代錯誤の記憶と意識が表面化したようにも見える。歴史研究が、現代の関心から過去の事実への再解釈と意味づけをやり直すという方法から逃れることができないのと同じく、歴史上の人物やその人物が評価した歴史の内容について、後の者は、自らが生きている時代の視点から批判を加えていくことは、避けて通れない道なのかもしれない。

そこで次に、日本の沖繩認識、沖繩人の日本認識について、さらに少しく考えていくことにしたい。

五 同祖論と同化論

沖繩人のヤマト日本本土にたいする思いには、特徴的な現象が現れやすい。強いて単純化して言えば、期待と反発の離反した態度である。沖繩人のこうした考え方は、期待や願望が実現するかのように見えて、動揺しながらも実際には、期待と願望は、現実の荒波に呑み込まれ、かって抱きし夢は確実に色あせていく。こうして期待と要求の敗退

の後の状況から大きく取り残される。そうかと言って、巨大な現実を変革して元に戻すということは、とうてい出来ない。そうした認識の揺れ動きが、沖繩人の心の中には存在するのである。たとえば、「歴史に翻弄される」とか、「歴史に圧死つぶさされている」との表現はそのようなことを言い現したのであろう。事大主義的な態度、自嘲の姿勢が見られる。

明治政府は、清国への配慮を念頭に置きつつ、琉球王国・沖繩を近代国家の中に取り込もうしていた当初は、旧慣制度を残し、沖繩の旧支配層の士族からの要望も聞き入れながら、徐々に試行錯誤の後、日本の統治下に組み入れようとした。そうした考えに大きな転換を与えたのは、鹿野政直が、柳田国男にふれて指摘しているように、日露戦争のころからであった。日露戦争が終り、戦争によって発生した多額の負債をいかに賄うかという問題が発生したのである。これは沖繩地域に限ったことではないが、さまざまな節約や増税が始まる。そうすると、それまで緩やかにやっていた行政が許されなくなり、国家としての上からの強い締め付けが始まっていく。

沖繩はそれまで、琉球王国という一つの政治、文化、宗教をもった社会であった。中国との朝貢関係も認められていた。そこには一種のナショナリズムが存在したのである。そうした慣習・習俗が、この時期に、日本という近代国家の歯車に飲み込まれていかざるを得なくなったのである。従来からの沖繩的なもの、あるいは沖繩人のアイデンティティーが崩壊していくという問題が、そこに生じたのである。

変化する体制にいかに対応すべきか、それを沖繩人に自己認識させたのが、伊波普猷であるといわれている。彼の著書『古琉球』に代表される日琉同祖論の考え方である。伊波の考えは、グスク(城)時代と言われる沖繩の近世、古琉球の時代に、日本への統合あるいは同化という思潮の原型のようなものがすでにあったというものである。要するに、沖繩と日本本土との間には共通した面があり、その共通要素を顕著に示すことによって、沖繩人の近代化への精神的な抵抗を和らげようとしたとされる。

伊波普猷は、言語学的な分析を通じて沖縄の言葉の中に残る古い日本語を探っていた。そして、沖縄の歴史を資料によって実証可能なぎりぎりのところまでさかのぼることによって、日本との関係が一つつながっていることを究明しようとした。それが日琉同祖論という概念であったとされる。沖縄と日本との関係には確かにそうした一面があることは否めない。しかし、日本復帰運動の時期、日琉同祖論の考えをとると日本を批判的にとらえることができなくなり、結局、伊波の批判へとつながったのである。そうした面が彼の研究を、非常に良く理解させると同時に、誤解させる側面になっているのではないだろうかと思われる。

その点について最近、外間守善は『沖縄学への道』の中で次のような見解を述べている。すなわち、伊波普猷はおもろさうしの研究の成果として、日琉同祖論にたどり着いたのであり、当初から同祖論の結論を持っていたわけではないという見方である。したがって、復帰運動に関わりをもった人々が批判したような日琉同祖論について伊波普猷の学問を批判するのは、的を射たものではないと外間は考える。学術的に見れば、外間守善の言う通りであろう。問題は、歴史研究の結果出てきた結論と、それを受容する人たちの考えに、思考のずれが生じているという点である。歴史は、その時々時代の雰囲気によって認識されていくものである以上、ギャップの生じることは避けられないであろう。

伊波普猷はさらに、沖縄文化の古いところを研究すればするほど、日本の文化が南のほうに近づいてくるという説と唱えた。要するに、歴史をさかのぼれば、日本と琉球は一つにかさなるという考え方であった。源流に接近すれば、同じ側面が拡大する。

伊波普猷の沖縄文化の研究への評価は、大掴みに言えば紛れもなく大正デモクラシー期における学術の一つの形態であると認められている。

六 縮図論の変容

先に見たように、伊波の研究が大正デモクラシー期の一翼を担う成果であったと評価する一方、やや批判的ともとれる見解を述べていたのが、津田左右吉である。家永三郎著『津田左右吉の思想史的研究』によれば、津田の伊波普猷の沖縄研究に対する評価は、批判的な言葉で表現されている。この視点は、同じく柳田国男あるいは河上肇に対する批判にもつながっているように感じられる。津田は、伊波普猷の沖縄研究の方法に触れて言うに「琉球によって日本上代を推測することには無理があるが、それはあたかも日本上代によって琉球を推測しがたいのと同じである」と述べている。伊波のこのような類推のし方の方法論に対して率直な疑問を投げかけている。つまり、先に述べた類型的な思考様式というものは、場合によっては、危険性をはらむ可能性がありうる。この批判精神が津田の実証史学の基底に流れていた。

津田はさらに琉球、沖縄人が異人種の混合であると考えられるにせよ、日本人の一分派であり、その文化が日本の上代研究の参考になることは是認しつつも、それをどの程度に参考になるかをより重視したのである。要するに実証的に測定可能な領域で歴史研究を進めなければならないという禁欲的な姿勢を堅持しつつ、伊波の研究手法への批判的な警鐘を鳴らしているのである。当時の琉球・沖縄研究の潮流には、伊波普猷に代表される縮図論という考え方が強い旋律として奏でられており、その点について津田は、「強いて日本人と琉球との一致を考えるよりも、同じ人種に属しながらも、いかにして、いかなる民族生活の差異から、その特殊な歴史が展開せられ特殊な民族が養成せられるようになったかを明らかにするほうが、むしろ大切であろう」と述べている。津田の視点は、沖縄の比較研究が類似や共通性のみに偏し、特殊な差異なる側面を閑却し、そのため性急に誤った結論を引き出すことへの批判になっている。津田の主張する批判的な見方も、縮図論的な思考様式の陥穽を突いていて、大いに肯定できる面もあり、厳し

い批判のなかにも伊波への温かい配慮を感じさせる。

ところで、文化論とは、いささか位相を異にする異色の縮図論も紹介しておきたい。その人物とは沖縄から南洋へと探検した志賀重昂である。志賀は、「公会堂事件」の起きる直前と日露戦争の起きる直後に沖縄を訪ねている。二度目の来島の時は、ロシアの運送船ズンガリー号を松江丸と改めた仮装巡洋艦に乗り込んできた。そこで、志賀を驚かせたのは、急激な沖縄社会の変貌であったという。かつて、ナポレオンをして戦争を知らぬ「平和な民」の存在を不思議がらせたが、今やその民も国運をかけた日露戦争に二千人の兵士を派遣し、自発的に帝国に協力するまでに一変した。彼の志賀の縮図論の構造は、地理学をベースに組み立てられており、人口論と関連させて次のように展開する。すなわち、沖縄あるいは日本のような小さな島国に、これほど多くの人々が居住していることは、様々な問題をはらんでいる。その打開策として海外へ進出すべきであるというのが、彼の考え方である。つまり、問題点を解決する方法を、沖縄の経済的な疲弊を核としてその相乗効果を志向しながら日本の将来を見据えるという縮図論として表現したのである。そのことを志賀に語らせてみよう。

「沖縄県（琉球）が面積は過小、人口は過多、而も工業原料及び動力の皆無なる島土にして、全く行詰りとなる状態は正しくは日本の縮図である。志ある者は先づ琉球を視察するを要す、何となれば日本の将来を洞察し又如何に日本を処理すべきやとの問題を解決すべき最も時宜に適へる前提である故である」

このように沖縄・琉球への関心から出発して、日本の問題の解決を図ろうとする発想と思潮は、当時強く存在していたことを示している。

七 方向

琉球の歴史を、日本の歴史の縮図であるという前提に立って研究しようとする風潮が当時存在していたことを、住

谷二彦も『日本の意識』の中で述べている。伊波普猷と河上肇の「問題意識の共鳴基盤」の核心が、そこにあると住谷は指摘する。その視点で伊波を見ていくと著書の中でも『古琉球』よりも『古琉球の政治』の方が重要であるという。琉球史と日本史との相似形的な発想、同心円的な発想、あるいはまた「酷似」性の指摘と詳細な分析は、住谷一彦著『日本の意識』を参考にしていたきたい。

さて次に、伊波普猷と柳田国男の沖縄研究の関係について述べてみたい。研究者の中には、伊波と柳田の二人の間に目に見えない確執があったとの見方がある。私もそのような雰囲気を感じてきた。研究者の中には、伊波と柳田の二人の間、個人的な研究者の間では、確執のない世界は存在しないはずであると思う。研究分野が限りなく近接しておれば、確執の起こる可能性は、さらに高まるはずである。要は、その確執を引き起こす原因となった内容と質量ではなからうか。ともあれ、学説の対立を人間関係に解消してしまっただけでは、理解の深化が削がれてしまわないかと危惧する。むしろ確執の存在が、研究の情念へと微温に転化する側面に注目したい。

伊波普猷は、自己の学問の精密化をもちろさうしの言語分析の解明から出発している。沖縄の古代の歴史言語を研究していくと、限りなく琉球の素材の分析結果は、古代日本に近づいていく。その結果、琉球人の先祖は、やまと日本の方から南の沖縄へ来たという考えを発見した。伊波は『日本文化の南漸』や『沖縄考』などで、繰り返しその考えを論文にして著している。一方それとは逆に、柳田国男は『海上の道』に集大成されるように稲作文化は南から北に伝来したと述べる。両氏の考え方は、同じ沖縄の先史・古代史を研究しながら、かたや柳田は南から、かたや伊波は北からとあたかも沖縄の地で文化伝播の影響力の衝突が起こるのように見える相異なる見解にたどり着く。衝突力はそれほど強烈とはいえないが、北行き南行きの交差点の沖縄での正面衝突が行われているかのようである。

この論争の輪郭は、言われているように透明度が低く見えにくい。主張の根は、地形深く張っているようである。ところが、単純に両者の主張を比較するに際して、大きくねじれたズレが存在するのではなからうか。それは沖縄の

歴史年表を一瞥すれば、ある程度判るはずである。日本に稲作が伝来するのは縄文時代後期とされる。はじめ北九州にもたらされた稲作は、弥生時代に水田農耕として定着したと言われる。つまり、ヤマト日本へ稲作文化の将来された時代と、伊波普猷がおもろさうしに深く沈潜して、沖縄と日本との関係を説明した時期とで、その対象とする時期があまりにかけ離れているように感じられてならない。少なくとも教世紀の間隔があるのを否定するわけには行かない。そうした大きな時差の存在が、両者の主張に介入する問題を誤解と確執の方向に追いやる結果になっているのはなからうか。ヤマト日本と琉球・沖縄の関係において、伊波が主張するように沖縄文化の基層の多くが、日本の本土から流入・伝播してきたということは否定しようもない。一方で、稲作文化のやまと日本の北行き一派が、沖縄を経由して北上したという仮説を立てることに十分に根拠があるであろう。その説も簡単には否定できないのではないだろうか。もしそうだとすれば、両方とも矛盾することなく歴史の流れの時期の前後に挿入することで共存しうる。そのように見ると先の北上説と南下説の二つ見解は、表面では対立しているように見えているが、時差を配慮すれば、調和すように見える。このように理解して行くなれば、二つの相異なる学説の問題は、年表の配列の中に収まるように思われる。この単純化の理解は、誤解のもとだろうか。

ところが、従来はその時代的な時差を無視して、壮大なロマンを感じさせる日本文化の南漸説と稲作文化の北上説という異なった見解を進行の異なるベクトルとしてとらえ、両者の唱えた学説の対立を二人の人間関係の対立に解消して、後の研究者から確執という誤解の土壌を形成した要因になったのであろう。

八 戦後

さて戦後の沖縄の認識と意識の中心に登場するのが、中野好夫である。中野は沖縄返還の問題の重要性と啓蒙活動を非常に早い時期から論じている。日本の国民や憲法からも見放された時期に中野は国民の意識の中に戦後沖縄の現

状を知らせる必要を感じ、沖縄資料センターを創設する。その資料センターを基盤として、沖縄返還のための国民運動を展開していくことになる。中野には心中秘かに決定していたことがあった。中野は京都の三校時代、野球部の先輩で最後の官選沖縄県知事となる島田敏にある畏敬の念を抱いていた。沖縄人を見捨てず、沖縄戦で行方不明となつたこの官選知事に、沖縄人は非常に親しみを持った。確かに戦時末期の沖縄知事への就任の受諾は、場合によっては、死を覚悟しなければいけない状況にあった。事実、沖縄県知事へのなり手はいなかった。中野がこうした先輩の島田敏に親しみを感じていたことが、自分を沖縄に惹かせた一面であったと著書『沖縄と私』の中で述べている。中野の沖縄認識の基底には、島田知事への深い共感が貫通していたとみるべきであろう。

さて、丸山真男も述べているように、中野好夫の考え方には沖縄に対する悔恨共同体的な思考が非常に強いこともまた事実である。この中野の考えに共鳴したのが伊波の弟子であった比嘉春潮である。比嘉は、戦時に空襲をうけ焼き出された伊波普猷を自宅に引き取り、気力の衰えた伊波を励まして、再びおもしろ研究・沖縄研究に目を向けさせた。比嘉は中野好夫の沖縄資料センターとも協力して、沖縄問題の普及活動に努めている。

その沖縄資料センターは、復帰・返還実現を機会に中野好夫と中村哲の合意に基づき法政大学に移され、学内の沖縄文化研究所となって今日にいたっている。沖縄認識の発進基点として脈々とその精神が受け継がれ活躍している。歴史のめぐり合わせというものが、このように身近なところで作用していることに感懐をもちよう。

沖縄の人々の中には現在も、限りなく日本への回帰を志向する人たちがいる。その一方で、琉球王国的な発想で新しい局面を開き、近代以降の負の遺産を解決するために、独立を目指す考えを持つ人々もいる。そうなると、伊波普猷を再評価しようとする流れも出てくる。彼が日琉同祖論という思想を持ちながらも、沖縄の個性を主張したという点での再評価である。そうした思潮の顕著なものとして、沖縄独立論的な傾向も出てきた。

最近の研究では、戦後の沖縄独立論というのは、日本復帰よりもむしろ現実に有り、むしろ日本(祖国)復帰の

ほうが幻想的であったようである。しかし、そう期待していたとはいえ、現実には、復帰・独立の主張はアメリカの統治下では結局のところ果たせなかった。

沖繩のナショナルリズムには、そうした現実的政治的な意味での祖国復帰思想と琉球独立論とがある。その両者の根底に共通する文化共同体が存在するようである。祖先崇拜や琉球舞踊など、長い歴史文化の集積された琉球ナショナルリズムがそれである。最近はこちらの方の傾向が大きくなってきていると思う。復帰も実現し、政府の姿勢もいくらか見え、自己の歴史と文化を見直す余裕もできた。

そうした民衆の意識の変容は、こうした沖繩の変革の反映として発生してきている。

先述したように、沖繩の社会の中にヤマト・沖繩という二元論的な考え方が非常に強い。基地の問題も、安全保障の問題と同時に、その二言論的な思考に大きく規定されている。沖繩が従来から抱えている未解決の問題である。異民族支配を経験してきた沖繩の人々が、差別されないことへの回帰として琉球ナショナルリズムを志向した。

時代の変遷とともに、沖繩認識の考え方も大きく揺れ動いていく。思想史も政治史も、考えてみれば非常に影響し合って進んでいるのである。どこに軸足を置くかによって、考え方が異なって見える。沖繩を認識するという人の中には、非常に優れて思想的な面を持っている方もいるのと同時に、非常に実践的に、あるいは啓蒙的な活動を通して、変革に参画した人たちもいたのである。そうした沖繩の認識論について、論じることが、極めて重要な課題であるように思う。(この原稿は、法政大学を会場として全国の若手研究者を集めた研究会である「思想史の会」で発表した報告に手を加えたものである)

参考文献

1. 住谷一彦「日本の意識―思想における人間の研究―」(岩波書店、一九八二年)
2. 鹿野政直「近代日本の民間学」(岩波新書)、一九八三年
3. 鹿野政直「歴史のなかの個性たち―日本の近代を裂く―」(有斐閣選書)、一九八九年
4. 比嘉春潮(『沖繩の歳月』中央公論社〈中公新書〉、一九六九年参照)
5. 外間守善「沖繩学への道」(岩波現代文庫)、二〇〇二年
6. 鹿野政直著「沖繩の淵―伊波普猷とその時代―」岩波書店、一九九三年参照
7. 中野好夫「日本人のなかの沖繩」一九六三年(『中野好夫集』四 逆臣は歴史によみがえる、筑摩書房、一九八四年に収録)
8. 「沖繩と私」時事通信社、一九六八年

「沖繩資料センターのこと」(『図書』九月号一九七一年掲載。のち『沖繩と私』時事通信社、一九六八年所収)